OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	疑問助詞「やらん」の成立
Author(s)	山口, 堯二
Citation	語文. 1990, 53-54, p. 64-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68808
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

疑問助詞「やらん」の成立

山口堯二

一　はじめに

中世は国語史上、古代語から近代語に移る大きな変動の時期である。次にその例の一斑を示す「やらん」は、そういう時期に「にやあらん」という連語の一体化によって出現成立した疑問助詞である。[1]

此ハ何カニ為ル事ヤラムト心モ不得ネドモ
（今昔・二十九・二十四）

百鬼夜行にてあるやらんと、おそろしかりける。
（宇治拾遺・十二・二十四）

「御酒ハ参リ候ヤラム」ト問ヘバ、大方ハ愛酒ノ上戸ナルガ…
…「酒ハノミ候ワズ」ト云。
（沙石集・七・二三）

また問、「人は何として仏には成候やらん」と。
（徒然草・二百四十三）

「やらん」が形態上「にやあらん」を原形として変化したものであることはすでに確認されているが、[2]本稿では中世という変動期にこの新しい疑問助詞「やらん」がなぜ成立することになったのか、その事情を、国語史の大きな流れである構文の論理化との関係を中心に考えてみようと思う。

「やらん」が出現するのは、係り結びの盛んな古代語から、その崩壊によって少しずつ構文の論理化していく過渡期である。その点に留意して「やらん」の成立事情を考えれば、およそ次のような問題点が浮びあがる。(1)中世には「にやあらん」に類する文末形式が一般に目立ってくるが、それはなぜか。(2)「にやあらん」はなぜ「やらん」へと一体化したのか。(3)「やらん」の成立には、「に」の脱落を伴う。その脱落を遂げさせたのは、どういう力であったか。(4)既存の疑問助詞のありようから見て、「やらん」の成立にはどのような意味があったか。以下、この(1)～(4)を中心に考察を進める。

二　成立の時代背景

「にやあらん」は、「にあらんV ならん」という文末形式に、

「や」が介入した形である。そこでまず、「にあらんVならん」的な文末形式とそれに対する係助詞の介入という現象の時代的な意味から考えてみよう。

「にあらんVならん」的な文末形式としては、「にありVなり」「〔にありVなり〕＋助動詞」、および、それらの敬語形などを一括して考えることができよう。いずれも、体言および活用語の連体形に承接しうる文末形式であるが、構文の論理化という視点から特に注意されるのは、それが活用語の連体形に承接する場合である。「にやあらんVやらん」の一体化も、それが活用語の連体形に承接しうることが、深く関係していると考えられる。よって、ここでは、活用語の連体形に承接するそれらの文末形式を一括して、以下、〈連体「なり」的形式〉と略称することにする。この略称は、それが連体形に承接する形式であることと、「にありVなり」の形または意味を共有することとによる。

連体「なり」的形式自体は中古から認められ、院政期以後も、次のように係助詞の介入なしに用いられることがむしろ多い。その形式に対する係助詞の介入現象について考えるためにも、まずは連体「なり」的形式自体が、文の構成上、どのような働きを担いえたかを見定めておく必要がある。

「……伊尹・兼家などがいひもよほして、せさするならん」とおほせられて　（大鏡・師輔伝）

其ノ折ニゾ、「此奴ハ田楽ヲ以テ楽トハ知タリケル也ケリ」ト心得テ　（今昔・二十八・七）

連体「なり」的形式が、このように活用語の連体形に承接する場合、その形式の直前に来る連体形の活用語は、そこを文末として文に相当しうるもの(S)の述語（または、その一部）になっていると見ることができる。その意味で、連体「なり」的形式を文末とする文Sは、その文に相当しうるもの(S)を、その連体形という形で一体的にまとめて、当の文Sの資材に取り込み、それだけ立体的な複文（有属文）[3]として構成されていることになる。ただ、文に相当しうるもの(S)の連体形による資材化にも、その(S)を体言に近い準体句として資格[4]に位置づけてしまう場合と、右の例のように、むしろ文相当の判断性を備えたまま、よりやわらかに資材化する場合とがある。前者の場合は、連体「なり」的形式も、体言承接の場合に近くなるが、後者の場合は、その文Sの判断が、(S)の文相当の判断性を極めて直接的な資材にしていることになる。連体「なり」的形式の文Sは、そういう点に基づく判断の確認性の高さにおいて、その判断の対象に対する主題的な自覚性や、それに対応する述語の解説性におのずから優れ、いわゆる題述的な表現性を担いやすくなるだろう。

連体「なり」的形式の文Sが担うことになる、そういう判断のありようから見て、その内部に直接資材化される文相当部分(S)の構成も、おのずから論理的なまとまりの強いものになる。論理性に優れる係助詞「は」「も」は別として、いわゆる係り結びに関わる係助詞の類は、その文相当部分(S)の中には、まず介入しえないことになるだろう。とすれば、連体「なり」的形式による構文に対して係助詞の介入しうる部分は、おのずとその連体「なり」的形式の部分に限られてくるのである。

連体「なり」的形式に係助詞の介入した例は中古から見られるが、中世（院政期以後）には、量的にもそれがめだってくる[5]。その頃には、たとえば次のような例がごく容易に得られるのである。

はやうこの殿は、われをあぶりころさんとおぼすにこそありけれ。（大鏡・伊尹伝）

それをなづけて五時教とはいふにこそはあなれ。（大鏡・序）

いとかゝる運にをされて、御兄たちはとりもあへずほろび給にしにこそおはすめれ。（大鏡・道長伝）

「我レ入テ戸ハ差テキ。其ノ後、女、人ニ云フ事モ无カリツルニ、何ニシテ我ガ食物ヲサヘ持来タルニカ有ラム。若シ異夫ノ有ニヤ有ラム」ト思ヒケレドモ（今昔・二十九・三）

然テハ頼信ガ抑テ寝入テ候ツル程ニ、鬼ナムドノ取テケルニヤ候ラムト云ケレバ（今昔・二十七・十二）

このうち、「やらん」の成立と直接関わるのは、係助詞「や」の介入した形であるが、その他も、文末の連体「なり」的形式への係助詞の介入例という意味では、「にやあらん」と一括できる共通点を備えている。

ところで、連体「なり」的形式に対するこのような係助詞の介入には、係助詞の介入現象一般から見ると、やや特殊な点を認めることができる。いわゆる係り結びは、係助詞が文中のある成分を提示して述語との結合を強めるとき、それに特定の形の結びが呼応する規則であり、係助詞の文中への介入の多くは、そのような形で行われる。しかし、上に見た題述的な表現性の強い述語の連体「なり」的形式は、文末の辞的形式である。そのため、そこに介入する係助詞の用法は文中の係り用法にちがいなくても、その助詞の働きには、特定成分を提示するというより、むしろそこで確言的または疑問的に一つの判断を措定する、措定的指定的意味あいのほうが強まる。つまり、形の上では文中用法でも、その意味や働きは質的に文末用法に近くなる。

中世という時代は、構文の論理化への志向とともに係り結びの体系が揺らぎ崩壊していく時代である。連体「なり」的形式に係助詞の介入する構文は、すでに述べたように、直接的な資材となる文相当部分の論理的なまとまりの強さにおいて、構文の論理化への志向を満足させる条件を備えていると言えるが、それとともに、介入する係助詞の用法が、質的に文末用法に近づく点も、既存の係り結び体系の、論理化に逆らう性格をそれだけ弱めるありようとして、時代の志向に沿えたことであろう。連体「なり」的形式の部分への係助詞の介入例が、中世（院政期以後）にめだってくるのも、その意味で、既存の係り結びの弱体化をめざして、係り結び的発想の転換をもとめる時代の志向の産物と考えられる。「にやあらん∨やらん」の一体化が起きた背景には、そういう時代の志向があり、その一体化は、それに順応できる構文に起きた変化であった。いや、むしろ連体「なり」的形式に係助詞の介入した形自体が、係助詞の介入にもかかわらず、すでに述べたその文末形式としての特殊性において、一般に連語的な一体性をもつ勢いにあったとも言える。

連体「なり」的形式に係助詞の介入した形が一体化する変化は、だから、確言系の係助詞「こそ」の介入形にも生じた。中世に現れる次のような「ごさんなれ」「ごさんめれ」は、それぞれ「にあるなり（∨なるなり∨なり）」「にあるめり（∨なるめり∨なめり）」という連体「なり」的形式に、係助詞「こそ」の介入した「にこそあるなれ」「にこそあるめれ」から一体化したものである。

されば那智の奥にて身をなげてましますごさんなれ。（覚一本平家・十・三日平氏）

あッぱれ、是は斎藤別当であるござんめれ。（同・七・実盛）

ここでも、係助詞「こそ」の働きには、文中の係り用法でありながら、むしろ確言的にその文の判断を措定する意味あいが強まり、質的に文末用法と近くなることにおいて、係り結び的発想の転換をもとめる時代の志向に順応していると言えよう。一体化した「ござんなれ」「ござんめれ」は、推定の助動詞「なり」「めり」を意味の中核とする肥大化した一種の助動詞として、推定を表すものになっているが、そういう時代の志向への順応性とそれ故の慣用がもしなければ、こういう一体化も起こり得たかどうか疑問である。

このように、確言系の係助詞「こそ」の介入した連体「なり」的形式にも、同様の事例がある。これらのことを併せ考えると、「にやあらん」が「やらん」へと一体化する背景に、係り結び的発想の転換をもとめる時代の志向が働いていたらしいという推定は、いっそう容易になる。

三　「やらん」への一体化

しかし、係り結び的発想の転換をもとめる時代の志向が等しく働いても、連体「なり」的形式に係助詞の介入する形が、それだけで一体化を遂げるわけではない。「ござんなれ」や「ござんめれ」を加えても、その事例はむしろ限られているのである。したがって、「にやあらんV やらん」の場合、特に係助詞「や」がほかならぬ「にあらん」と一体化したのはなぜか、そのより個別的な原因が、当然、次に問われなくてはならない。

「や」が介入できる連体「なり」的形式は「にあらん」に限らないのであり、事実たとえば次のような例も容易に拾えるが、そういう形には、「にやあらんV やらん」のような一体化は認められない。

「……此の穴ニ入テ有ヲバ不知ニヤ有ルラム」ト思テ、（今昔・十二・二十八）

然レバ雷電霹靂ニハ非ズシテ、倉ニ住ケル鬼ノシケルニヤ有ケム。（今昔・二十七・七）

「や」の場合、「にあらん」に介入した形だけが特に一体化したのはなぜか。その主たる理由は、両者の意味的な相互関係に求められてよいだろう。「にあらん」と「や」との意味的な相互関係といえば、それは疑問と推量との交渉ということになる。そこには、どのような交渉が考えられるだろうか。

「にあらん」は、その「む（ん）」において推量語の働きを担う形式である。推量の助動詞「む（ん）」は「らむ」「けむ」に比べても、時制の制約が少ない意味で最も基本的な推量語と言える。つまり、「にあらん」は、連体「なり」的形式の中でも基本性の高い推量の働きを担う形式であった。そう考えれば、「や」と一体化したのが、連体「なり」的形式の中で最も基本性の高い推量語の働きを担う「にあらん」であり、「にあるらん」や「にありけん」でなかったことは、けして偶然でないと言える。

「にあらん」に「や」が介入することは、それを文末形式とする文を疑問表現にするということである。その意味で、両者の意味的な相互関係上、主となるのは「や」による疑問であり、「にあらん」による推量は従と見てよい。疑問表現は、疑念の解消をめざすことをその本性とする。その述語文節に現れる推量語の基本的な働きは、想像による疑念解消をめざす強い自問性を明示する点に求めら

れる。[6] 対他的な疑問表現によっては、述語文節の推量語も、それ以外の対他的な働きを担いもするが、「にやあらん∨やらん」の一体化は、「や」と「にあらん」との基本的な働きが、かなり大きく重なり得た結果であろうから、「やらん」の成立上、推量語の二次的な働きについて考えるのは二の次でよいだろう。「にやあらん∨やらん」の一体化は、「や」による狭義の疑問表現において、「にあらん」（特にその「む（ん）」）の明示する強い自問性が、ちょうど「や」の示す疑念解消志向という疑問の本性を強めるように、重なりあうことができた結果であろう。言い換えれば、狭義の疑問表現において、「や」と「にあらん」のそれぞれ基本的に担う意味が同心円的に重なり、後者によって前者が強調され得たことが、先述の時代背景に加えて、「にやあらん∨やらん」の一体化を遂げさせた、より個別的な原因と考えることができる。一体化した「やらん」は、「や」と「にあらん」との一体化の結果であることにおいて、さしあたり疑問助詞であると同時に推量語でもあることになるが、すでに述べたように「や」が主となる意味において、一体化した「やらん」の性格は、何よりも疑問助詞であろう。推量語性はむしろその疑問助詞性の一特徴にとどまり、「やらん」の成立後はそれも次第にめだたなくなっていったかと思われる。

なお、疑問助詞「やらん」は、「や」が係助詞であったのとは違って、いわば終止用法専用の助詞―終助詞になる。[7] 連体「なり」的形式に対する係助詞の介入は、すでに述べたように、文中用法でありながら質的に文末用法に近く、係り結び的発想の転換をもとめる時代の志向に沿いうるものであった。しかし、「にやあらん∨やらん」の変化において、そういう係助詞の介入形式から、疑問の終助詞が成立したことは、係り結びの内部から既存の体系と張り合う反対勢力が生み出されたようなものである。これが係り結びの崩壊に向かう時代の動きを示す意味あいは、だから、連体「なり」的形式に介入した係助詞の質的な文末用法化などとは、もはや比較にならないであろう。「やらん」の一体化は、その意味で係り結びの崩壊にとってもかなり決定的な意味をもつと考えられる。

四　「に」の脱落をめぐって

「にやあらん∨やらん」の変化には「に」の脱落を伴う。それを遂げさせた力も、まずはそこに含まれる「や」の働きに求められよう。「や」に限らず、係助詞の文中用法は、その直前で論理的な関係表示を担うはずの格助詞などを、しばしば脱落させる。連体「なり」的形式に介入する場合の用法は、質的に文末用法に近いが、その場合にも同じことがあって、係助詞はその直前の「に」を脱落させることが少なくない。連体「なり」的形式の「に」は、「なり」の連用形と見られるものであるが、これも語源的に格助詞「に」と繋がることは言うまでもない。連体「なり」的形式に係助詞が介入して、その直前の「に」を脱落させたかと見うる例には、たとえば次のようなものがある。第三例は、「にやあらん」の結びの文節の省略形「にや」における「に」の脱落形と見うる。

よの中にてをのゝをとする所は、東大寺とこの宮とこそはべるなれ。（大鏡・実頼伝）

何ナル事ニテ失ヒツルカ有ム。児ヲ敵ト思テ、殺ト思テ殺ス人ヤハ可有。（今昔・二十六・五）

此レヲ思フニ、賤ノ物ノ、故モ不知ヌ童也ト云ヘドモ、年来、極楽ヲ願ケルヤ|、ロヲ動カシケルハ、念仏ヲ申シケルナメリ。
（今昔・十五・五十四）

係助詞の文中用法が、その直前で論理的な関係表示を担う格助詞などを、脱落させがちなのは、係助詞の提示性が、構文の論理的な流れを一旦断ち切ることになる、そのおのずからなる影響であろう。連体「なり」的形式に係助詞「こそ（は）」「か」「や」が介入して直前の「に」を脱落させているこれらの場合も、係助詞「こそ（は）」「か」「や」の後に文節の切れ目がある点では、なおそれら係助詞の提示性によると見ることが可能である。しかし、「にやあらんVやらん」の「や」は、その後で文節が切れるどころか、後続する「あらん」と熟し、一体化して疑問助詞—終助詞に転じていく。それを思えば、その「や」は、構文の論理的な流れを一旦断ち切るどころか、語順的には文中の係り用法のまま、すでに新しい疑問助詞—終助詞の性質をもつ連語の一部と言える傾きを備えていると見なければならない。「にやあらんVやらん」の「や」は、そういう連語の一部であることにおいて、むしろその結び用法・終止用法に近づいていると見てよいことになる。

終助詞とは、本来係助詞の結び用法だけに固定したものに与えられた名であるが(8)、係り用法の「や」を含む「にやあらん」が、一体化してそのまま結び用法だけの終助詞「やらん」に収斂するこの変化は、係り用法即結び用法的に質的転換を遂げたものであり、係助詞の係り用法に由来する終助詞の成立として注意してよいと思われる。

「やらん」のこのような疑問助詞—終助詞的側面から見れば、その出現成立において「に」の脱落を遂げさせたのは、係り用法的な「や」のたんなる提示の働きではなく、むしろすでに後続する「あらん」と熟して、新たに疑問助詞—終助詞へと一体化しようとする力を備えた「にやあらん」という連語全体の働きと言うべきであろう。それは、文中の係り用法の提示の働きに対して言えば、広義における指定の働きと考えてよいかと思う。係りの「や」は疑問的な提示の働きをもち、結びの「や」は疑問的な指定の働きをもつと見れば、「に」を脱落させたのは、その後者に近い「にやあらん」の疑問的な指定の働きであろうと考えられる。「やらん」へと一体化した原因は、狭義の疑問表現において、「や」と「にあらん」のそれぞれ基本的に担う意味が同心円的に重なり、後者によって前者が強調され得たことに求められるとしたが、そういう形で一体化しようとしたとき、「にやあらん」全体の疑問的な指定の働きにおいて、意味上「や」に従属することになる「に」が本来の形をとどめる必要性を失うのは、当然の勢いであったと思われる。

確言系の「こそ」の介入による「ござんなれ」「ござんめれ」への一体化にも、「に」は母音の脱落によって「こVご」の濁音化を招いた。濁音化に影を残す点が、「やらん」の場合と異なるとも言えるが、「や」には対応する濁音がないから、影も残さなかったのであり、「に」の脱落を遂げさせた事情には、相似たものがあると考えられる。なお、仮名草子の伊曽保物語には、上接語なしに、応答語的に用いられた「こさんなれ」の例があるが、これは前二者とは成立に差があると考えることができる。

「さればこそ、さやうに人にいましめられんことを知らざる事にて侍か」と申ければ、「こさんなれ」とてゆるされける。
（伊曽保物語・上・六）

なお、体言承接の「にぞありける」にも、次のように「にざりける」という一種の一体化が、はやく起きている。係助詞の働きから言えば、この一体化も結び用法への質的接近の結果と言える面がある。しかし、「に」の脱落を伴わない点でも、連体「なり」的形式の一体化とは差が認められる。

照る月の流るる見れば天の川いづるみなとは海にざりける
（土左・一月八日）

「やらん」の成立において「に」を脱落させた力は、原形「にやあらん」が、構文の論理化に向けて係り結び的発想の転換をもとめる時代志向のもとに一体化しようとしたとき、意味上推量語である「にあらん」が、「や」の示す疑念解消志向という疑問表現の本性を強める補強性を持ち得て、その一体化を促進できたことの中に求められるであろう。「にやあらん∨やらん」における「に」の脱落は、「やらん」の出現する当初からかなり固定的一般的に現れることも、そういう想定を支持する。ただし、「にやあらん∨やらん」の変化におけるその中間的な形の「にやらん」の例もないわけではない。しかし、その例はかえって限られるし、「やらん」の出現する早い時期に現れるというわけでもないようである。変化の一過程の反映とは必ずしも限らないであろう。

かなふまじき由頻にの給ひけれ共、出家入道まで申たればにやらん、しばらく宿所にをき奉れとの給ひつれども、始終よかるべしともおぼえず。
（覚一本平家・二・少将乞請）

五　既存の疑問助詞との関係

「やらん」は、係助詞「や」の一部が、意味上「にあらん」の補強を受けて肥大化した終助詞である、と見うることを述べたが、既存の疑問助詞「か」「や」の体系的ありようから見ると、「やらん」の成立には、どのような意味が認められるであろうか。

「や」は、中世において不定方式・特定方式を問わず、また、文中用法・文末用法のいずれにも、普通に用いられていた。一方、「か」は、不定方式において疑問詞と呼応する文中用法は盛んであるが、特定方式については、文末用法に限られる傾向がすでに中古のころから顕著であった。[9]「やらん」の原形「にやあらん」に、疑問助詞「か」でなく「や」が核となるのは、そういう「か」と「や」の勢力だけから見ても、当然であった。

しかし、新しい疑問助詞「やらん」が、「か」でなく「や」を核として成立したことには、なおそれ以上の意味が認められるようである。「やらん」の成立によって、それと直接競合することになるのは、既存の疑問助詞「か」「や」の文末用法であるが、「や」は文末用法において、活用語の終止形に承接する助詞であり、「か」は連体形に承接する助詞であった。「か」と「や」には、そういう承接の違いがあったが、周知のように中世には、本来の終止形が次第に連体形にその場所を譲っていくという、終止形・連体形の同化現象が進行する。終止形承接の「や」は、その承接法において、本来の終止形が退化していく時代を生き延びるには、何らかの自己変革を迫られていたことになる。その意味で、既存の「や」は、係り結びの崩壊に伴う文中用法の衰退のみならず、文末用法においても、時代の変化に順応しにくい面を備えていたわけである。それに対して、連体「なり」的形式「にあらん」の補強を受けて「や」から転

成した「やらん」は、連体「なり」的形式の承接法によってもとより連体形に承接する。その承接法の点でも、「やらん」は時代の流れに適応できるものとなった。「やらん」はその意味で、既存の「や」との関係においては、最初から優位に立てる面を備えていたことになる。「やらん」の早い例が一例だけ認められる今昔物語集あたりでは、文末用法の「や」の終止形承接には、まだ乱れが目立たないけれども、「やらん」の成立後、それとの競合によって、「や」が次第に文語化していった理由には、「や」に対する「やらん」のこの承接上の適応力の優位も、かなり大きな比重を占めるのではないかと思われる。

一方、「か」のほうは、文末用法において連体形に承接するから、終止形・連体形の同化現象が進行する中世にあっても、承接上の不適応は起こらなかった。というより、上代以来「や」にその領域を譲ってきた「か」にとって、構文の論理化を求める時代の状況は、むしろその勢力を挽回しやすいものになってきたと言えよう。

連体「なり」的形式は、連体形に承接することによって、文に相当しうるものを一体的にまとめて直接的な資材とし、いわゆる題述的な表現性を担うと同時に、その文の構成をおのずから論理的なまとまりの強いものにした。文末用法の「か」も、連体形に承接するその点において、論理的な構文性や題述性を備えやすかったと考えられる。たとえば次のような例にそういう特徴は容易に認められるのであり、「か」のそういう働きは、「や」によるそれよりは、「やらん」のそれに近いと言えよう。現代語に置き換えれば、これらの連体形に付いた「か」は、現代語のたんなる「～か」よりも「～のだ」的な解答案から成る「～のか」に近い。

殿上人共、「彼レハ曽タムガ参タルカ」ト忍テ問ヘバ、
（今昔・二十八・三）

「此ハ何ナル事ゾ。何ナル者ノ入来テ、此ハ云ゾ」ト云テ、心ニ思ハク、「盗人ノ物取ニ入タルカ、亦ハ殺シニ来タル者カ」ト思ツルニ、
（今昔・二十九・四）

こういう点から言えば、上代以来「か」が「や」に侵されていったのは、概して言えば情意性に優れた構文においてのことであり、実はその反面、「か」は論理的な構文への適応性を密かに養っていたことになるかもしれない。しかし、疑問助詞の領域が「か」の勢力によって統一されるのは、もっと先のことである。「か」のそういう適応性がなお十分でなかったからこそ、それまで勢力の強かった「や」を核とし、しかもその終止形承接に見られる弱点を補うかたちで「やらん」が登場することになったと考えられる。

〔注〕

(1) 拙稿「疑問表現の推移」（宮地裕編『論集日本語研究(二)歴史編』昭61、明治書院）、拙著『日本語疑問表現通史』（明治書院）第六章。この「やらん」は次のように「やらう」となることもあるほか、「やらん・やらう〳〵やら」と短縮されて、時代が下ると「やら」の形が普通になっていく。

おほいやらう、すくないやらうをば、しり候はず。
（覚一本平家・五・富士川）

是ハドチヘツケテヨカラズヤラウト疑ハシカラウヲバ赦シテ従罰ヨゾ。
（史記抄・周本紀）

クビノホドニチカヅキテ、ナニ、ヤラオドロキテ恐タル気色ニテニゲサリ給ツルトイフ。
（慶長十年古活字本沙石集・八）

(2) 山田孝雄『平家物語の語法』。

(3) 山田孝雄『日本文法学概論』。

(4) (3)に同じ。

(5) この点については、「蜻蛉日記」「源氏物語」「大鏡」「今昔物語集」を中心に、その傾向を確めた。

係り結びに関わる係助詞で、連体「なり」的形式への介入が認められる確言系のそれは、「こそ」に局限されている。稀に次のような「なむ」による例もあるにはあるが、その連体形部分は、文脈上「たがふる（まらうど）」などの意の純然たる準体句である可能性が強い。

まらうどなん、しばしと思ひ侍りしを、四十五日の方たがふるになん侍りける。（落窪・一）

『源氏物語大成』索引の「にや〔動詞連体形接続〕結ビアリ」には、13の例が上がっているが、文脈上その連体形部分に原因理由の意の「……する（故）」という体言的意味が認められる例を除くと、残りは7例である。中世における量的増加は、その残り7例に類する例の増加である。

(6) 拙稿「疑問表現の推量語」（『国語と国文学』66巻7号、平1・7）、拙著『日本語疑問表現通史』第五章。

(7) やがて文中における副助詞にも転じるが、それは「やらん」成立後の推移の問題と見てよい。

(8) (3)に同じ。

(9) (1)の拙稿・拙著に同じ。

——大阪大学教養部教授——